

「能登半島地震」に思う

令和6年が明けました。前号の1月号で新年のご挨拶をさせていただいたところでした。その元日早々の大地震、そして津波警報で本当にびっくりさせられました。

私も、元日に近くの子供たちが来て、我が家の孫達も含めて、楽しい新年を迎えたところでした。そして、その子供たちが夕方帰ったので、テレビをつけたところ「緊急地震速報」が出ました。びっくりしたのですが、まさか今出ているものだとは思いません。2, 30分前に地震があって、「これだと震度2かな。」というような話をしたのを思い出しました。でも、まだ今出ている緊急地震速報だとは思いませんでした。何か、以前の時の特集かな、という感じでした。でも、アナウンサーの声が尋常ではない様子です。チャンネルを替えてみました、そこも同じですので、やっと今起こっていることだと気が付いたのです。これまでは、元日早々にこんな大きな地震が起り、津波警報が出るというようなことは全く意識の中になかったのです。ゆっくり考えてみれば、地震はいつ起こるか分からないのですよね。そして、状況によってその後、津波が押し寄せることもあるのですね。こうしたことは、私も来館者にお話するガイダンスの中で話していたのです。でも、まさか正月早々、本当に起こるとは、本音では思っていなかったのです。甘かったです。

私たちは、「稲むらの火」の安政元年(1854)という遠い昔の地震津波の出来事を、教訓として防災活動の基本として、行動してきました。でもそれは絵空事になっていなかったでしょうか。空想のような、また物語になっていなかったのでしょうか。もちろん「稲むらの火」は物語です。そして、原作者の小泉八雲も現地広村へ取材にも来ていないので、史実と違うところもあります。

令和6年の元日早々に起こった「能登半島地震」から、これまでの私たちの津波防災に関する啓発活動は、物語であるが、物語にしてはいけない。

見直す必要があるのかな、と思いました。

「第20回稲むらの火講座」を開催します

稲むらの火講座は20回目となりました。この間、1度は台風接近で、1度はコロナで中止になりましたが、今回で18名の講師をお迎えすることになりました。元々、この講座を計画したのは、「稲むらの火の館」の館長を始めとした職員に専門家がないので、普段お世話になっている先生方にお話をさせていただいて、その専門的な不足分を補いたいということでした。

第20回稲むらの火講座を開催いたします。今回の講師は、和歌山県立博物館の前田正明学芸員です。1994年から県立博物館に勤務されています。日本近世史を専門として、和歌山の戦国時代から江戸時代における地域社会のあり方を、指導的立場にある有力者に注目して研究されています。2011



年9月の紀伊半島大水害をきっかけに、災害史研究の必要性を痛感され、先人たちが残してくれた「災害の記憶」を未来に伝える取り組みも行っています。広川町でも社寺に保存されている古文書等の調査をしていただきました。

2022年の特別展「濱口梧陵と廣八幡宮一法蔵寺・養源寺・安楽寺の文化財とともに一」を企画し開催されました。広川町の文化財を公開すると共に、歴史を伝えていただきました。

今回、こうした経験をもとにお話いただきます。

演題 「安政地震津波と濱口梧陵」

日時 令和6年3月16日(土)13:30~15:00

いつものように、定員60名で、申し込み順とさせていただきます。稲むらの火の館(電話 0737-64-1760)へお申し込みください。

百世安堵

関西大学社会安全学部 近藤誠司

第35回 福祉BCPに込めた覚悟

筆者の研究室では、大阪府高槻市で、介護保険事業者協議会防災対策部会と協働して、BCP（事業継続計画）の策定支援事業を行っている。ときには、学生が施設の事情を学びながら事業者と一緒にBCPを策定したりもしている。

介護保険事業者といっても、入所施設なのか、通所施設なのか、訪問のサービスを行っているのか、業態によって考慮しなければならない事項は大きく異なる。また、事業所の規模によって、やれること／やれないことが全く違う。

事前の対策によって、重要な事業のダメージを出来る限り減らし、災害時においても出来る限り事業を継続すること、もしくは、出来る限り早く平常に戻すことをBCPは求めている。しかし、現場の“ホンネ”を言えば、理想と現実は乖離している。そもそも平常自体に、すでにして余裕がないのだ。

そこで、あるデイサービス事業者とコラボしたBCPには、次のようなスローガンを掲載した。「災害時には無理をしない。無理をさせない」。

災害時には利用者のみならずスタッフの安全も確保しなければならないのだから、ライフラインが復旧しない限り（もしくはそれに相応する救援物資が届かない限り）、無理してサービスを行わないことを明言したのだ。水害時も、二次災害の危険があれば、スタッフは自動参集などしない。

これは、とても冷たい考え方のように見える。所詮、文書なのだから、「出来る限り営業します」と理想を謳ってもよかった。しかし、そうはしなかった。現実を直視したのだ。そのうえで関係者はBCPの読み合わせをするうちに、ある種の「覚悟」を持つようになってきた。「無理をしない」とは、イコール、「出来ることは確実にする」ということなのだ、と。本物のBCPは、現場の意識改革を迫る。これを好機としよう。

【館長日記】

① 「ニュース和歌山」という新聞折り込み紙があります。紀北地方の新聞に折り込まれているそうです。本年1月1日号に、面白い記事が載っていました。和歌山の偉人で、「紙幣になってほしい和歌山の人物」というコーナーがありました。今年から、新しい肖像画の紙幣が発行されるとの事から出て来た発想でしょうね。

1番が南方熊楠、2番松下幸之助、3番華岡青洲、4番陸奥宗光、5番が濱口梧陵と有吉佐和子となっています。その解説がついていました。県立博物館の竹中学芸員の解説では、「実際に紙幣に選ばれるとすれば、梧陵さんでしょうか。防災始め地域おこしなどの貢献度から可能性が高い。」とされています。正月早々、楽しみなニュースで嬉しくなりました。

② 今年度、館長は和歌山県教育委員会から「和歌山県学校安全総合支援事業」のアドバイザーを委嘱されました。都合3回の会合がありました。県下のモデル地域として、田辺市、湯浅町、印南町、那智勝浦町の1市3町の教育委員会が、1年間安全教育、防災教育の研究実践をされました。

1月に、1年間の総括の会合をされました。それぞれの地域で、小中学校を主な対象として取り組まれていました。全部の地域には、海の沿岸部がありますので、「南海トラフ地震津波」の際の避難訓練をされています。避難所での炊き出し訓練、段ボールの間仕切り体験、簡易トイレの設営体験というように、避難所での課題を考えながら実践されていました。それぞれの地域で、これまでの訓練、体験を積み重ねて実践されていることが、よく分かりました。昨年、6月の豪雨災害の事や平成23年の紀伊半島大水害で大きな犠牲を払った町など、近年に大きな災害を体験された所もあります。稲むらの火の本町のように、古い時代の災害は、直接その状況を目の当たりにしていないので、理解し難い点もあります。災害は出来るだけ体験したくないのは本音です。しかし、自然災害はいつか必ず起こると思います。その為に、物理的と精神的な準備をしておかなければなりません。いろいろな機会をとらえて、その時に備えておく必要があると思いました。